

國學院大學學術情報リポジトリ

「基礎日本語」科目におけるSAIを導入した文章表現 能力向上の可能性

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 道代 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000839

「基礎日本語」科目におけるSAIを導入した文章表現能力向上の可能性

鈴木道代

キーワード

基礎日本語 SAI 日本語能力の向上 書くと考える

1. はじめに

國學院大學では、平成27年度より、「教養総合科目」の一環として、大学1、2年生対象の「基礎日本語」科目を開講している。この「基礎日本語」科目は、平成29年度より共通教育プログラムの汎用的スキル群の「日本語」科目として再編成され、現在に至っている。平成29年度の「日本語」科目の目的として、「大学におけるすべての学修の基礎となる日本語理解力、表現力、語彙力、文章構成力等を研磨し、適切な日本語コミュニケーション能力を獲得する」ことが掲げられている⁽¹⁾。この教育目標に基づき、平成29年度「基礎日本語」科目においては、前期と後期との両方において、小論文の作成（600字、1000字）を中心として、文章の内容要約・意見文、敬語の使い方、手紙・メールの書き方などの授業を展開している⁽²⁾。

本稿では、特に「基礎日本語」科目の小論文の作成において、文章力向上支援サービス「SAI」を用いた授業の取り組みとその成果と改善点について述べる。

2. 「基礎日本語」科目の概要

「基礎日本語」科目は、渋谷キャンパス前期15コマ、後期15コマ、たまプラーザキャン

パス前期1コマ、後期1コマの全32コマを開講している⁽³⁾。平成29年度のシラバスでは、「基礎的な日本語(国語)能力を養う」ことをテーマに掲げ、「『読む・書く』を中心に、基礎的な日本語力を確認し、自分の考えを文章にまとめる学修をします。具体的には、①グループワークを通して論理構築の練習をする、②熟語、同音異義語、慣用句、ことわざなどの基礎語彙力をはかる小テストを通して、語彙力を向上させる、③文章要約の仕方、引用の仕方、敬語の使い方、手紙の書き方を確認する、④ ①～③の体験と学びとを通して、大学の学修に必要なレポートや論文を書くための基礎を学ぶことを目的とし、基本的にテキスト『基礎日本語』を学ぼう～国語力の向上をめざして～⁽⁴⁾に沿った授業を展開している。

シラバスに掲載した授業計画は以下の通りである。

- 第1回 ガイダンス(授業の目的・方法・計画)、文章のどのような点が評価されるかを知ろう。
- 第2回 主観・客観について学ぼう。意見を出し合おう。
- 第3回 全体の構成を考えよう。小論文の書き直しをしよう。
- 第4回 小論文の推敲し清書をしよう。
- 第5回 資料を読んで意見文を書こう。
- 第6回 内容要約をしよう。
- 第7回 返却・フィードバック。引用と剽窃について学ぼう。意見を出し合おう。
- 第8回 全体の構成を考えよう。小論文を書こう。①
- 第9回 小論文の読み合わせをしよう。推敲をしよう。
- 第10回 小論文を書こう。②
- 第11回 清書をしよう。
- 第12回 敬語を学ぼう。①
- 第13回 敬語を学ぼう。②
- 第14回 手紙・メールの書き方を学ぼう。
- 第15回 返却・フィードバック

このほかに、1回目と15回目を除く全13回の授業内に、基礎語彙力向上を目指した小テストを行っている。また15回の授業を大別すると、1～11回目において小論文の作成を行い、12～14回目で教養ある文章を書く、15回目で半期の振り返りとフィードバックを行うという構成をとっている。小論文授業では、グループワークを取り入れながら、課題作成

を行っている。

特に小論文の作成については、2つのテーマ(600字、1000字)について学生が執筆した小論文を添削し返却をするだけでなく、学生自身が執筆した小論文の修正点を考え、推敲し、書き直すという、「書く」と「考える」との往還を通して、文章力の向上を目的とする

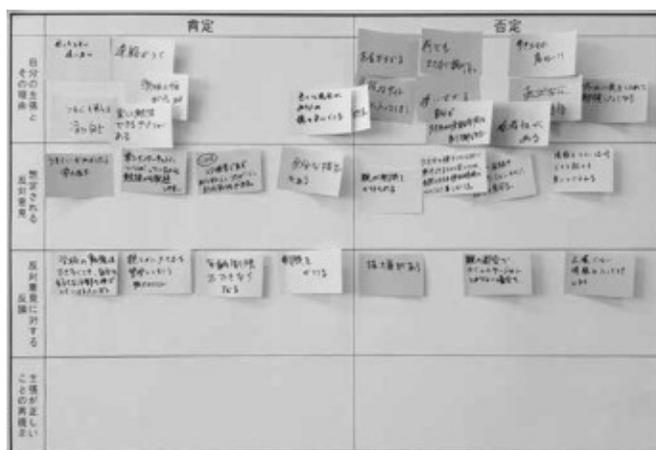


図1

ことを特徴としている。例えば平成29年前期の600字の小論文執筆では、「コンビニエンスストアは必要か不要か」というテーマについて、はじめに各学生が執筆し、テキストのループリックに基づいて、基本的な原稿用紙の使い方や論理性、客観性、構成力などの項目について自己採点を行う。次に客観的な文章とは何かという点を確認した後に、グループワークを行い、意見を出し合う(図1)⁽⁵⁾。次の段階として、グループワークの成果を踏まえて、各自が小論文の全体の構成を考え、アウトラインを作成する。そして全体の構成に沿って、2回目の小論文執筆を行う。教員は2回目執筆した小論文について、論理展開の妥当性を中心として添削を施す。学生は返却された小論文の添削コメントとテキストの「推敲しよう」の項目を参考にしながら、自らの小論文を推敲、修正し、清書をして提出する。教員は、最終的に提出された小論文を再度添削して学生に返却して終了とする。この行程を第1回～第4回(計4コマ)の授業で行う。1000字の小論文では、「小学生にスマートフォンは必要か、不要か」というテーマを設定し、600字の小論文の行程に小論文の読み合わせ(グループワークにおいて小論文を発表し、学生同士でアドバイスを行う)を加えて、第7回～第11回(計5コマ)の授業で小論文の執筆を行う。

このように推敲、修正を経て小論文を書き直した上で、完成させることの意義は、一つに大学のレポート課題においては、返却されない場合が多いことが挙げられる。学生自身が、自分の文章のレベルを知る機会が少ない。学生自身の文章が具体的にどのような評価されているかを知る機会となる。二つに客観的に自分自身の文章を見直す機会を与えることにある。このことにより論理展開の妥当性や表現が適切に使用できているか、読み手に伝わる文章かなどを自ら発見し、認識することができる。

3. SAI システムの概要

このような成果を期待する中で、授業内、もしくは添削段階において、学修者の文章作成能力のレベルが大きく異なるという問題が生じている。「基礎日本語」科目は、大学1、2年生であれば学部や学修者のレベルに関係なく履修することができる。また、学力別のクラス分けも行っていない。例えば文章表現能力が低い学生の場合、添削箇所が論理展開から文章語彙の表現まで広範囲に及ぶため、学修者自身が修正しきれない、また問題点が複数あるため修正方法の糸口を見つけることが困難である、などの問題がある。特に教員の添削では、論理的に文章を書くことができるか、文献やデータなどの引用が適切に行われているかなどの点を重点的に指導する必要がある、そのため話し言葉と書き言葉との違いや小論文に適した語彙の選択方法など、ごく基礎的な指導が、学修者のレベルによっては困難なことがあった。この点については、どの程度丁寧に添削するか、またどこをポイントとして添削するかなど、現在に至るまで試行錯誤してきた。たしかに、基礎的な表現力の指導は学修者のレベルが低い場合には、文章力向上という点において有効である。しかし、修正項目が多くなればなるほど学修者が指摘された内容を消化できないという問題があった。

そこで平成29年度前期の筆者の授業において、試験的に文章を自動で分析・診断するSAIを導入することにより、学修者の文章表現能力の底上げを図った⁽⁶⁾。

SAIは株式会社ザ・ネットの開発したインターネットを利用した「文章力向上支援サービス」であり、2008年にリリースされた⁽⁷⁾。SAIは、「学生やビジネスパーソンが書くレポート、報告書、提案書、学術論文」を対象として、200字～2000字の文章を、①センテンス（一文）の長さ、②漢字使用率、③名詞率、④用言率（動詞・形容詞）、⑤接続詞率、⑥指示語率、⑦副詞率、⑧特有の言葉遣い、⑨文末の統一感、⑩話し言葉、の10項目を診断し、100点満点で診断することができる。

株式会社ザ・ネットによる「SAI」の開発方針と特徴によると、

- ・ 利用者（学習者）が書いた文章を入力後、通常1分以内で文章診断が完了する。事実上、リアルタイムで診断結果が出るので、利用者はすぐに文章を修正して再び診断を実施する、つまり診断と修正を繰り返すことができる
- ・ 診断結果を点数化して表示する。修正前後の点数の比較もできるので、利用者はどこをどう直せば文章力を向上できるのか、的確に把握できる
- ・ Web上のサービスなので、時間や場所を問わず、Webブラウザがあれば、どこでも利用できる。

- ・ コンピュータによる診断なので、教師や上司などの人間による添削と比べた場合、教える側の癖が出にくい⁽⁸⁾

の4項目が、特徴として挙げられている。

1点目については、小論文の修正を自宅学修において行うことができるというメリットがある。「リアルタイム」での診断が可能であるため、教員の添削を待つことなく、基礎的な文章力の向上が期待できる。2点目については、診断結果が点数化されるので、基礎的な文章力の現状が可視化されると共に、修正により点数がアップすることで学修者のモチベーション向上が期待できる。3点目については、上記のように Web 上で使用することができるので、教室内だけではなく、Web が使用可能な場所であれば、時間・場所を問わずに学修することができる。4点目は、「基礎日本語」科目は複数の教員によって行われているため、教員による添削の観点や指導内容を均質にすることが課題であった。この点について、「SAI」を使用することにより、基礎的な文章指導については、均質な授業運営が期待できる。

4. 授業への導入

次に、SAIを導入した授業展開について述べる。2017年度前期授業の1000字の小論文執筆において試験的に導入をした。導入したクラスの概要は以下の通りである。

- ・ 2017年度前期、木曜日3限
- ・ 学生人数35名（内訳：1年生27名、2年生8名）

授業展開は以下の通りである。（下線部は事前学修を示す）

第8回 意見を出し合おう。全体の構成を考えよう。

第9回目の事前学修として、第8回の成果を踏まえて、1000字の小論文を執筆する。

第9回 小論文を推敲しよう。SAIの説明（PC教室）

第10回 小論文の読み合わせをしよう。小論文を推敲しよう。

第11回目の事前学修として、第10回の成果を踏まえて、1000字の小論文を書き直す。

第11回 清書をしよう。（PC教室）

まず第8回の授業において、通常クラスと同様にグループワークを行い、意見を出し合った上で、小論文の全体の構成を考えてシートに記入する。次に第9回の授業の事前学修として、1000字の小論文を Word で執筆をした上で、第9回の授業時にデータを持参する。

第9回の授業は株式会社ザ・ネットの橋本均氏から、SAIの使用方法や採点基準などを指導していただいた後、学生が持参した小論文のデータをSAIに入力し、自己採点する。さらに採点結果をもとに、各学生が推敲して自己採点を繰り返し、100点満点中85点以上の文章を、プリントアウトして教員に提出する。第10回は、前回の授業にて85点以上の文章を使用して、グループワークにて読み合わせを行い、グループ内のメンバーの小論文に対して批評してコメントペーパーに記入する（通常クラスと同様）。その後、グループのメンバーに批評してもらったコメントペーパーをもとに小論文の推敲を行う。第11回の授業の事前学修として、推敲した文章をSAIに入力して、85点以上となった文章をSAIにて教員に提出する。教員はSAIにて提出された小論文を添削し、第11回の授業時に返却する。第11回の授業において、学生は返却された小論文を推敲、修正した上でSAIに入力し、教員に提出する。これが小論文の完成原稿となる。教員は再度添削を行い後日返却する、という流れで行った。

5. SAI導入の成果と今後の課題

ここでは学修者の文章が、SAIを使用して自己採点した結果を踏まえて、いかに修正されたかについて、検証可能な事例を挙げて、項目別に報告したい。

(1) センテンス（一文）の長さ

1センテンスの文字数は40字を適正とし、45文字～75文字はオレンジ、75文字以上は赤で表示される。1回目の診断で10点満点中、9、10点の学生は、診断を受けた32名中14名いたが、ここでは特に点数の低かった5、6点の学生の内容が、診断を受けることにより、どのように修正されたかについて事例を挙げて検討してゆく。

事例1

2017年6月15日13:08

センテンスの数は16個、最も長く書かれたセンテンスの文字数は124字、75字以上で書かれたセンテンス数は7箇所あった。(5/10)⁽⁹⁾

(例) 幼いうちから文章で表現する機会に恵まれることによって、より多くの言葉を知ることになるし、何よりそれが勉強して得る知識とは違い、知らず知らずのうちにみにつけることができる、という点は、小学生が語彙力をみにつける方法として非常に適していると私は考える。(124文字)

2017年6月15日13:35

センテンスの数は16個、最も長く書かれたセンテンスの文字数は102字、75字以上で書かれたセンテンス数は5箇所あった。(7/10)

(例) 幼いうちから文章で表現する機会に恵まれることによって、より多くの言葉を知ることになる。(43文字)
そして何より勉強して得る知識とは違い、知らず知らずのうちにみにつけることができる、という点は、小学生が語彙力をみにつける方法として非常に適していると私は考える。(80文字)

2017年6月29日13:51

センテンスの数は16個、最も長く書かれたセンテンスの文字数は85字、75字以上で書かれたセンテンス数は1箇所あった。(9/10)

(例) 幼いころから文章で表現する機会に恵まれることによって、多くの言葉を知ることができ、なにより楽しみながら学べることは大きな利点である。(66文字)
よってラインは小学生が語彙力を身に着ける(筆者注:原文のまま表記した)方法として適していると私は考える。(37文字)

事例2

2017年6月24日23:44

センテンスの数は12個、最も長く書かれたセンテンスの文字数は125字、75字以上で書かれたセンテンス数は4箇所あった。(6/10)

(例) 一方で一日のスマートフォンの使用時間を減らすために、親が子供のスマートフォンを管理し、制限することが出来れば、依存度も抑えることができ、今の時代に欠かすことが出来なくなったスマートフォンを早い年齢から慣れさせることが出来るという意見も挙がるだろう。(125文字)

2017年6月29日14:17

センテンスの数は14個、最も長く書かれたセンテンスの文字数は119字、75字以上で書かれたセンテンス数は2箇所あった。(8/10)

(例) 一日のスマートフォンの使用を減らすために、親が子供のスマートフォンを管理したり、フィルタリングをかけるなどして制限することが出来ればいいだろう。(77文字)

そうすれば、依存度も抑えることが出来、今日、欠かすことが出来なくなったスマートフォンを早い年齢から慣れさせることが出来るだろう。(64文字)

2017年7月6日12:01

センテンスの数は15個、最も長く書かれたセンテンスの文字数は114字、75字以上で書かれたセンテンス数は1つあった。(9/10)

(例) 一日のスマートフォンの使用を減らすために、親が子供のスマートフォンを管理し、フィルタリングをかけることが出来れば、依存度も抑えられる。(67文字)

今の時代に欠かすことのできないスマートフォンを早い年齢から慣れさせることが出来るだろう。(44文字)

事例1については、2017年6月15日13:35の段階で、最も長く書かれたセンテンスの文字数は124文字であった。例に挙げた箇所については、診断後に2文に分けられた。その後さらに文章全体を修正してゆく中で、1文を短縮する工夫がみられた。この修正によって5点から9点へと点数の向上がみられた。事例2については、2017年6月24日23:44の時点で最も長く書かれたセンテンスの文字数は125文字であったが、その後2文に分けられ、さらに1文ずつを短縮する修正がみられた。この修正によって6点から9点へと点数の向上がみられた。「基礎日本語」の授業においても、「修辞法・原稿用紙の使い方」において、「一文は適切な長さであるか」というチェック項目を設けている。SAIで診断することにより、適切な修正が行われたと考える。

(2) 指示語率

指示語は、読み手に指示語の指す内容を探させるという手間をかけると同時に、読み手への誤解を招きやすい。SAIでは、指示語率を文章全体の1.8%に設定し、不要な指示語を減らすように推奨している。1回目の診断で10点満点中、10点の学生は、診断を受けた32名中28名おり、最初の診断の段階で比較的高得点であった。ここでは特に点数の伸び幅が大きかった学修者の文章を取り上げ、どのように修正されたかについて事例を挙げて検討してゆく。なお、以下の事例における下線部はSAIの評価によって、チェックされた箇所である。また波線部は修正された箇所である。

事例 3

2017年 6月15日13:08 (7/10)	2017年 6月15日13:34 (10/10)
何より <u>それが</u> 勉強して得る知識とは違い、	何より <u>それが</u> 勉強して得る知識とは違い、
子供同士の小さい <u>ざこざ</u> が次第にエスカレートしていても、 <u>それに</u> 歯止めをかけるということが難しく	子供同士の小さい <u>ざこざ</u> が次第にエスカレートしていても、歯止めをかけるということが難しく
<u>これは</u> 現実味のない対策だと私は考える	<u>これは</u> 現実味のない対策だと私は考える
<u>これら</u> に対して逆らうのは非常に難しいと私は考える	<u>これら</u> に対して逆らうのは非常に難しいと私は考える
<u>これらの</u> 理由から、	<u>これらの</u> 理由から、
子供がよりよく <u>それ</u> を使用できるようにすべきだと考える	子供がよりよくスマホを使用できるようにすべきだと考える。

事例 4

2017年 6月15日13:11 (1/10)	2017年 6月15日13:31 (10/10)
<u>それに</u> 適応していくには早いうちからネット環境になれることや、さまざまな情報のなかから自分の必要な情報を選別していく能力を徐々につけていくことが必要なことである。	<u>その状況に</u> 適応していくには早いうちからネット環境になれることや、さまざまな情報のなかから自分の必要な情報を選別していく能力を徐々につけていくことが必要なことである。
<u>これを</u> 小学生が正確・不正確を見極め、選別していくのはかなり無理があるのではないかという意見もある。	<u>このような情報</u> を小学生が正確・不正確を見極め、選別していくのはかなり無理があるのではないかという意見もある。
機器類がありふれた世界にいる今の子供たちはそれを活用し処理能力を養い、遅れをとらないようにするほうが良いのではと考える。	機器類がありふれた世界にいる現在の子供たちはそれを活用し処理能力を養い、遅れをとらないようにするほうが良いのではと考える。
<u>それが</u> ゲーム機と変わらない使い方に結果的になってしまったとしても、	<u>それが</u> ゲーム機と変わらない使い方に結果的になってしまったとしても、
色々なことに <u>そこで</u> 学んだことを活用していくことで	色々なことに <u>そこで</u> 学んだことを活用していくことで

子供がアクティブになっていくという良い循環が <u>そこ</u> にはあると考えているので、	子供がアクティブになっていくという良い循環が <u>発生</u> すると考えているので、
--	--

事例3において2017年6月15日13:08の段階では、「それ」「これ」「それら」など、指示語を6箇所使用していた。直後の修正において、「それに歯止めをかける」については「それ」を削除した。ただ「それ」を削除した場合、「エスカレートしていても、歯止めをかけるということが難しく」では何に対して「歯止めをかける」かが判然としない。その後の教員の指導により、「エスカレートした場合、歯止めをかける」というさらなる修正案を提示する必要がある。「子供がよりよくそれを使用できるように」については「子供がよりよくスマホを使用できるように」に改められた。

また事例4においては、2017年6月15日13:11の段階では、「それ」「これ」「そこ」など計6箇所使用していたが、「それに適応していくには」は「その状況に適応していくには」へ、「これを小学生が」は「このような情報を小学生が」へ、「良い循環がそこにはあると」は「良い循環が発生すると考えているので」へと修正された。指示語を回避する方法として、指示語の箇所を該当する語彙に置き換えたり、指示語+名詞に修正したりするなどの工夫がみられた。指示語についても「基礎日本語」の「推敲をしよう」の項目で指示語を多用しないよう指導しているので、SAIで診断することにより、適切な修正が行われたものとする。

(3) 副詞率

「とても」「たいへん」「少し」などの副詞は、曖昧な表現であり、小論文には適さない。他の言葉に言い換えるか、省略することを推奨している。適正值は文章全体の2.5%に設定されている。この項目については、9～10点の高得点者は22名いたが、特に点数が低い0～4点の事例を取り上げ、SAIで点数を可視化することでどのように修正されたかを検討してゆく。

事例5

2017年6月15日13:11 (0/10)	2017年6月15日13:33 (10/10)
私は小学生が <u>必ずしも</u> スマートフォンを持つ必要はないと考える。	私は小学生がスマートフォン（以下スマホ）を持つ必要はないと考える。

スマートフォンと比べると <u>比較的安価な</u> もので代用することが可能であるためだ。	スマホと比べると安価なもので代用することが可能であるためだ。
<u>さらに</u> 小学生のころから社会に興味を持つための情報収集の機能などがある。	小学生のころから社会に興味を持つための情報収集の機能などがある。
スマートフォンは携帯などに比べると <u>かなり便利</u> であるとされている。	スマホは携帯などに比べると便利であるとされている。
さらに携帯などよりも社会情報ツールとして大人向けのアプリが多いが <u>しっかり</u> したものがある。	さらに携帯などよりも社会情報ツールとして大人向けのアプリが多いが <u>内容が充実</u> したものがある。
ほかのことに目が行ってしまって <u>かえって勉強</u> に集中できない	ほかのことに目が行ってしまって勉強に集中できない
悪影響が及ぶことが <u>しっかりと</u> 制限をかけた携帯よりも多いことが予想できる	悪影響が及ぶことが <u>厳しい</u> 制限をかけた携帯よりも多いことが予想できる。
ネットに <u>しっかりと</u> した何重ものフィルタリングをかけて	ネットに何重ものフィルタリングをかけて
小学生が <u>必ずしも</u> スマートフォンを持つ必要はないが、もしどうしても持たせたい場合は	小学生が <u>必ずしも</u> スマホを持つ必要はないが、持たせたい場合は

事例6

2017年6月15日13:10 (4/10)	2017年6月15日13:32 (10/10)
しかし、小学生にとっては <u>どう</u> であろうか。	しかし、小学生にとっては <u>どう</u> であろうか。
<u>どれほど</u> 言葉が人を傷つけるか、	<u>どれほど</u> 言葉が人を傷つけるか、
<u>いざ</u> 人と面と向かって話をするとき、	対面で関わり話すより、
他人との接触が減ることは <u>もちろん</u> 、勉強の妨げになり成績の低下につながる	他人との接触が減り、勉強の妨げになり成績の低下につながる
<u>もちろん</u> 一方では、必要と考える意見もある。	<u>もちろん</u> 一方では、必要と考える意見もある。
簡単かつ <u>すぐに</u> 調べものができるという点も理由の一つにあがっている。	簡単で <u>すぐに</u> 調べものができるという点も理由の一つにあがっている。

小学生でも、 <u>管理をしっかりと</u> できれば与えてもいいということである。	小学生でも、 <u>管理が</u> できれば与えてもいいということである。
<u>特に</u> 幼少期は自分で歯止めが聞かず気づいたときには遅いといったことがよくある。	幼少期は自分で歯止めが聞かず気づいたときには遅いといったことがある。
このように発達を妨げるものになりうるスマホは、 <u>やはり</u> 小学生のうちは遠ざけておく必要がある。	このように発達を妨げるものになりうるスマホは、小学生のうちは遠ざけておく必要がある。

事例7

2017年6月15日13:11 (0/10)	2017年6月24日21:54 (10/10)
小学生に限った話ではないが、学生は調べ学習で <u>しばしば</u> インターネットを利用する。	小学生に限った話ではないが、学生は調べ学習でインターネットを利用する。
それは小学生のときも <u>そう</u> だった。	それは小学生のときも <u>同じ</u> だった。
しかし、パソコンは開いてから調べるに至るまで、 <u>少し</u> 面倒くさい。	しかし、パソコンは開いてから調べるに至るまでが面倒くさい。
パソコンよりも <u>ずっと</u> 手軽である。	パソコンよりも手軽である。
しかし、 <u>それだけ</u> インターネットの近くにいるということは、	しかし、インターネットの近くにいるということは、
電話やメールは <u>もちろん</u> 、SNSやゲームも気軽に利用することができる	電話やメールは <u>もちろん</u> 、SNSやゲームも気軽に利用することができる。
<u>特に</u> SNSはトラブルの原因になりやすい。	<u>特に</u> SNSはトラブルの原因になりやすい。
<u>実際</u> 、SNSについて、前文部科学大臣・馳浩氏は、	SNSについて、前文部科学大臣である馳氏の指摘から、
<u>いかに</u> スマホが子供たちの中で大きな役割を果たしているかがうかがえる	スマホが子供たちの中で大きな役割を果たしているかがうかがえる。
これは <u>すでに</u> 社会問題と化している。	これは <u>すでに</u> 社会問題と化している。
では対策の余地はないのか、 <u>といえ</u> ば <u>そう</u> ではない	では対策の余地はないのか、 <u>といえ</u> ば <u>そう</u> ではない。

まず <u>第一</u> に、一番重要であるのは	第一に、 <u>最も</u> 重要であるのは
スマホをやっている時間は <u>どうしても</u> 子供のやっていることが親からは見えにくくなる。	スマホをやっている時間は子供のやっていることが親からは見えにくくなる。
使用できる時間を制限して <u>なるべく</u> 子供との対話の時間を作る。	使用できる時間を制限し、子供との対話の時間を作る。
どのような状況にあるのかを把握しなければ、 <u>なかなか</u> 問題は表面に現れてこない。	どのような状況にあるのかを把握しなければ、問題は表面に現れてこない。
最後に、 <u>やはり</u> 私は小学生にスマホは必要であると考える。	対応箇所無し
トラブルに巻き込まれる可能性を <u>大いに</u> 含んでいる。	トラブルに巻き込まれる可能性を <u>大いに</u> 含んでいる。

事例5については、2017年6月15日13:11の採点時に副詞と判断されたのは10箇所であったが、同日13:33の診断時には1箇所となった。「必ずしも」「比較的」「かなり」などの表現は省略され、「しっかりしたものがある」は「内容が充実したものがある」に修正された。この事例の場合、「しっかり」という表現が重複して用いられている傾向にあったが、診断によりこの重複表現が浮き彫りとなり、表現の修正につながった。

事例6については、2017年6月15日13:10の採点時に副詞と判断されたのは10箇所であったが、同日13:32の診断時には、4箇所となった。「簡単かつすぐに調べものができる」については、「すぐに」を、また「管理をしっかりできれば」については「しっかり」を省略するという方向で修正された。ただ「幼少期は自分で歯止めが聞かず気づいたときには」の箇所は、「SNSやゲームなどを使わせたくないのなら最初からガラケーにすればいいのではないかという気がしてならない。」を承けており、とりわけ幼少期の頃の危険性が高いという主旨なので、「特に」の副詞を入れた方が、より適切な表現になるものと考えられる。

事例7については、2017年6月15日13:11の採点時に副詞と判断されたのは17箇所であったが、24日21:54の診断時には、5箇所となった。「しばしば」「少し」「ずっと」「なるべく」「なかなか」などの曖昧な表現が多用されていた。この診断結果に対して、「少し」「ずっと」「なるべく」などの語彙は省略された。また、「それは小学生のときもそうだった。」については、「それは小学生のときも同じだった。」というように、「そう」から「同じ」とい

う表現に修正された。また「まず第一に」については、意味上の重複があったが、「第一に」に修正された。

副詞の適正割合を診断した結果に対して、学修者は副詞を削除するという傾向にある。もちろん削除しても意味が通り、なおかつ曖昧さが解消するという面で適切な場合もあるが、曖昧な表現を具体的な数値や表現に言い換えるという技術の指導をする必要があると考える。

(4) 話し言葉

「話し言葉」と「書き言葉」との境界は不明瞭であり、多様である⁽¹⁰⁾。何処まで許容するかは問題があるが、論理的な文章を書く上で、「話し言葉」を使用しないことを推奨している。適正値は0.0%に設定されている。ここでは、特に当項目において点数が低かった4つの事例を取り上げ、いかに改善されたかについて述べる。

事例8

2017年6月15日13:17 (6/10)	2017年6月15日13:36 (10/10)
調べ学習をする上で非常に役立つ <u>から</u> である	なぜならスマホは、調べ学習をする上で非常に役立つ <u>ため</u> である。
私も <u>今</u> でも調べものをするときは	私も <u>現在</u> でも調べものをするときは
パソコンよりも <u>ずっと</u> 手軽である。	パソコンよりも手軽である
まず第一に、 <u>一番</u> 重要であるのは	第一に、 <u>最も</u> 重要であるのは

事例9

2017年6月16日19:06 (3/10)	2017年6月28日12:03 (8/10)
なぜなら、スマホは多くの危険を孕んでいる <u>からだ</u> 。	なぜなら、スマホは多くの危険を孕んでいる <u>ためだ</u> 。
ガラパゴス携帯(以下、ガラケー)を持っている人が数人いる <u>くらい</u> だった。	ガラパゴス携帯(以下、ガラケー)を持っている人が数人いる <u>くらい</u> だった。
<u>ほとんどの</u> ガラケーを持たない子供は	<u>大半の</u> ガラケーを持たない子供は
そのため、だれもがインターネットを使うことは <u>ほとんど</u> なかったが、それは小学生がネットを使う用事が <u>なかった</u> からである。	そのため、だれもが、インターネットを使うことは <u>すくなく</u> なかったが、それは小学生がネットを使う用事が <u>なかった</u> ためである。

それは <u>今</u> でも変わらないと私は考える。	それは <u>現在</u> でも変わらないと私は考える。
学校で防犯教室を実施している <u>から</u> 大丈夫だと考える人もいるだろう。	学校で防犯教室を実施している <u>から</u> 大丈夫だと考える人もいるだろう。

事例10

2017年6月15日13:15 (6/10)	2017年6月15日13:31 (10/10)
加えて、 <u>どんな</u> 利用をしているか、子どもと話し合う機会を持つことも大切だ。	加えて、 <u>どのような</u> 利用をしているか、子どもと話し合う機会を持つことも大切だ。
「友達と <u>どんな</u> 話をしているの？」などの会話を普段からしておくことで、異変がわかりやすくなる。	「友達と <u>どのような</u> 話をしているの」などの会話を普段からしておくことで、異変がわかりやすくなる。
しかし、 <u>今</u> の現状ではやはり不要だと考える。	しかし、 <u>現在</u> の現状ではやはり不要だと考える。

事例11

2017年6月15日13:05 (5/10)	2017年6月15日13:46 (10/10)
なぜなら、スマートフォンをいじる時間があることによって家族や友人とのコミュニケーションが <u>減る</u> からだ。	理由は、スマートフォンをいじる時間があるために、家族や友人とのコミュニケーションが <u>減る</u> ためだ。
スマートフォンは、 <u>便利だから</u> こそ「直接話す」という重要な行為をしにくい環境にしてしまうのだ。	スマートフォンは <u>便利な</u> ために、「直接話す」という重要な行為をしにくい環境にしてしまうのだ。
<u>今</u> の時代、高校生では96%、中学生では49%、小学生では30%と、若年層のスマートフォン所有状況が増えているのは現状だ。	<u>現在</u> 、高校生の96%、中学生の49%、小学生では30%と、若年層のスマートフォンの所有状況が増加しているのは現状だ。
親の立場からすれば、ぐずっている子供にスマートフォンを見せれば機嫌が直り、育児にも <u>とても</u> 便利だ。	親の立場になってみれば、ぐずっている子供にスマートフォンを与えれば機嫌が直り、育児にも <u>大変</u> 便利だ。
実際、独立行政法人による「保護者の就業に関する調査」を見てみると、両親が働いてる <u>世帯</u> の割合は61%に昇る。	実際、独立行政法人による「保護者の就業に関する調査」を見てみると、両親が <u>仕事</u> をしている世帯の割合は61%にも昇る。

「話し言葉」の項目については、SAIが診断でチェックした箇所の改善案を提示している。そのため学修者にとり、最も改善しやすい項目であった。

事例8では、「から」は「ため」へ、「今」は「現在」へ、「一番」は「最も」へ、「ずっと」は省略するというように改善された。

事例9については、「から」と「今」とは事例8と同様に修正され、「ほとんど」は「大半」へ、「ほとんど」は「少ない」へ改善された。

事例10については、「どんな」が「どのような」へ、また「？」は省略された。しかし、この箇所の場合、発話をカギ括弧に入れるのではなく、「友達とどのような話をしているか」という会話を普段からしておくことで、「…」と修正することで、より小論文の書き方にふさわしい内容となると考える。また、「加えて」の表現については、「連用中止形」というSAIの指示が表示されたが、この点については改善されなかった。おそらく、この指示の意味が理解されなかったことが想定される。授業内ではこの点を発見できなかったが、今後の対策としては、教員が「連用中止形」の意味を説明する必要があると考えられる。なお、改善案としては、前文と接続した上で、「…制限できることに加えて、どのような利用をしているか…」という表現に修正すべきだと考える。

事例11については、「から」は「ため」へ、「今」は「現在」へ、「とても」は「大変」へと修正された。また「働いてる」という表現は、「仕事をしている」へと修正された。ただ、修正後の「便利のために」というのは、書き言葉としては不備があるように思われる。ここでは「便利であるために」とすべきだと考える。

「話し言葉」の項目については、改善案が提示されていることにより、単に省略するだけでなく、概ね適切な表現に修正することができたように思われる。

補足として、事例としては示さなかったが、「文末の統一感」の項目については、「だ、である」調で書くことが基準となっている。「ですます」調や体言止めを一箇所でも使用した場合は、0点の診断結果となる。この点については、学修者に概ね理解され、修正が施された。

6. おわりに～今後の課題とSAI導入の効果～

今回は、筆者の担当する1クラスのみ導入となったが、SAIを導入したことによって一定の成果が確認できたと共に、課題も浮き彫りになったように思われる。まずSAIの診断についての課題として、本稿で検証することができなかった項目が挙げられる。検証が叶わなかった項目として、漢字使用率、名詞率、用言率（動詞・形容詞）、特有の言葉

遣いがある。漢字使用率については、漢字とひらがなをバランスよく使用することが推奨されているが、「バランス」という判断が学修者には困難であったため、修正すべき根拠を見出せないまま、試行錯誤して点数を上げるということに止まったように思われる。また、名詞率と用言率とは相関関係にあるが、この点もまた客観的な判断が困難であると同時に、名詞と用言との語彙の判断基準が問題になると思われる。特有の言葉遣いについては、「こと」「もの」「する」など個人のクセで多用してしまう語彙をチェックする項目であり、換言すれば言い換え可能な語彙ということであろうが、その点も判断が困難であると共に、改善策を見いだせない傾向にあった。このような教員の判断が困難な項目については、学修者にとってもどのように修正を施せばよいかという改善策が見えづらい項目でもあると考えられる。

次に、SAIを取り入れた授業運営の方法も課題となった。「基礎日本語」科目は通常、手書きで小論文の執筆を行っている。それゆえ、授業の構成が手書きの小論文に沿った内容であった。最も問題となったのが、学修者がPCの扱いに慣れていない点であった。特に1年生が主体のクラスであったため、Wordを使用した経験がない学生も数名おり、学生の進捗状況にかなりの差異が出てしまった。この改善策としては、Wordによる文章作成の授業内容を組み込んだ授業進行が肝要である。

以上、「基礎日本語」科目におけるSAIを導入した取り組みの成果と課題について述べた。今回は、試験的導入という意味で非常に小規模な分析であるため、必ずしも一般的な結果が得られたわけではない。しかし、授業を運営する側としての課題は残しつつも、教員が添削を施す以前の段階でSAIを導入することにより、基礎的な文章表現についての指導が軽減されるという効果を得られたのではないだろうか。また、学修者にとっても、添削を受ける以前に文章表現上の問題を解消できることにより、論理構成および引用の仕方や出典の示し方などに特化した添削指導を受けることができるようになったと思われる。特に基礎的な文章表現能力に問題を抱える学修者が、SAIを使用して自己採点を行い、また自分自身の文章能力が可視化されることにより、文章の改善点に気づくことで文章表現能力の底上げという一定の成果は上がったと思われる。今後、さらなるデータの分析を行い、授業へフィードバックしてゆくことでより学修者にとり効果的な授業運営に取り組みたいと考える。

注

- (1) 「平成29年度（2017年度）入学者」履修要綱、國學院大學教学事務部教務課、<http://img.kokugakuin.ac.jp/assets/uploads/2017/03/8eaf010eb3c33fd3d744acafdee1965.pdf>（更新日 2017年5月17日）

- (2) 平成29年度後期では、意見文(400字程度)の作成も取り入れた。
- (3) たまプラーザキャンパス後期の講座は、別個のカリキュラムで行っている。
- (4) 『「基礎日本語」を学ぼう～国語力の向上をめざして～』(「基礎日本語」編集委員会、責任編集針本 正行、初版2017年4月、改訂2019年4月)
- (5) グループワークは、小論文の構成に沿ったフォーマットを使用した。より多角的な視野を踏まえた上で、テーマに取り組めることを目的としている。
- (6) 平成29年度後期では、たまプラーザキャンパス開講の人間開発学部教授成田信子先生の「基礎日本語」(国語力開発)においても、SAIが導入された。
- (7) 株式会社ザ・ネットの「SAI」は、商標登録第5215100号による。また会社概要は、株式会社ザ・ネット「会社概要」株式会社ザ・ネットホームページ、<http://www.za-net.co.jp/company/index.php> (閲覧日 2017年9月10日)。
- (8) 株式会社ザ・ネット「“文章”をめぐる状況とSAI開発の背景」株式会社ザ・ネットホームページ、http://www.za-net.co.jp/sai/services/sai_concept.php (閲覧日 2017年9月10日)。
- (9) 10満点中5点を意味する。以下同じ。
- (10) 山本雅子 大西五郎「話し言葉と書き言葉の相互関係—日本語教育のために」(『言語と文化』8号、pp73-90、2003年2月)

附記 SAIの導入は、平成29年度國學院大學FD推進事業(乙)「グループによるFD推進事業」助成、「学生の基礎日本語力を向上させる授業方法の開発」事業の一環である。